

**令和7年度
一般選抜(前期日程)
文化学科
[言語文化系／地域文化創造系]
小論文
問題・出題の意図・採点評価基準**

令和7年2月25日

高知県立大学

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（配点 100 点）

フェイクニュース（正しそうに見えてじつは間違っている情報）の拡散やポスト・トゥルースの世界観（客観的事実は重要ではなく、感情や信念への訴えによって事実がつくられていくという見方）には、哲学的な背景が存在する。（中略）現代哲学の文脈では、構築主義の描像がフェイクニュースやポスト・トゥルースと密接に関係している。ここで改めて、構築主義とこれらの結びつきを問い直してみよう。

まず、構築主義の主張の要諦は、こうである。すなわち、客観的な事実は存在しない。私たちが事実と呼んでいるものは、社会的・文化的につくられたものである。ここで事実が構築される過程には、さまざまな要素（文化、言語、宗教、歴史、ジェンダー、無意識、身体性、権力など）が介在している。しかし、これらの要素は普遍的たりえないので、存在とその認識は相対化される、という理屈である。

権力を例にとって、具体的に考えてみよう。構築の過程に（権）力が介在しているなら、私たちが事実とみなしているものは、パワーヒエラルキーの上部にいる人間にとって有利に働くようにでっちあげられたものである、ということになるだろう。簡単に言えば、強者にとって都合のよいことが事実とみなされ、それがまかり通っているわけである。

たとえば、女らしさや男らしさが規範化された社会では、女性と男性のあるべき姿が固定されているので、その規範とは別の生き方を歩もうとする人びとの自由は抑圧される。社会が良妻賢母の理想を押し付けるなら、それは妻にも母にもならない女性を苦しめるにちがいない。では、この社会通念は誰にとって都合のよいものだろうか。言い換えれば、この事実が存在することで、誰が得をするのか、ということである。それは、家庭のことを顧みずに仕事ができる男性かもしれない。社会をうまく回そうとする政治家かもしれない。利潤の最大化を夢見る資本家かもしれない。ここで強者の権力や意向が構築の過程にいかに入り込んだのかをつぶさに分析すれば、女らしさや男らしさの自明性は崩れる。そうして、それまで当たり前だと思われていた事実は、そのじつ特定のコンテキストに依存していたものにすぎない、ということが明らかになる。

このように、事実を相対化する役割を担うのが構築主義である。すなわち、事実は客観的に存在していない。それは必ず何らかの観点に対して相対的なものである。文化や社会によって、何が事実とされるのかは異なる。構築主義はこれらのことを暴き、事実、真理、本質、普遍性を徹底的に相対化するのだ（中略）。

時として暴力的に働く社会通念や世間の常識を批判する構築主義は、社会から疎外された人びとや周縁化された人びとを励ます思想になるだろう。特定の人びとの自由を著しく侵害する伝統的価値規範があるとき、社会で自明視されているその規範を相対化し、抑圧され周縁化された人びとの気持ちを代弁することができるなら、これは自由を擁護する思想にもなる。実際、ジェンダー論やカルチュラル・スタディーズは構築主義をその基礎理論と

して取り入れており、この意味で構築主義はマイノリティの側に立つ思想なのである。

ところが、構築主義には大きな課題が残る。それは、相対主義の限界を突破できない、というものである。一切を社会的・文化的構築物とみなしてしまうと、今度は、文化や社会の多様性を越境する普遍性を基礎づけることが難しくなるからだ。そこには当然、マイノリティの権利を支える自由や人権の普遍性も含まれている。構築主義の論理を押し進めた結果、自由や人権すらも相対化されてしまうなら、これはまずい状況というほかないだろう。

最も問題なのは、次のことである。すなわち、相対主義は、結局のところ、パワーゲームに対抗する手段を私たちから奪う、ということである。すべてが対等な構築物にすぎないとしたら、力による闘争も一つの正当な手段になってしまい、これに抜本的に反論することができなくなるからだ。実際、フェイクニュースの捏造やポスト・トゥルースの状況を利用した政治的ポピュリズムの台頭を、構築主義的相対主義は止められない。それどころか、むしろ世界観としてはそれを助長しているという残念な事実、私たちはそろそろ気づいてよい頃である。

（中略）

別の観点で考えてみよう。「人それぞれ」という言葉である。②話がうまく合わなくて議論が行き詰まりそうになったときや、意見の違いが際立ってきて何となくその場が気まずい雰囲気になってきたときに、私たちは「結局、人それぞれだからね」と言う。そのように言っておけば、その場の空気感を何となく守りつつ、議論や話し合いに緩やかな幕引きをはかることができるからである。

「結局、人それぞれだからね」と言われて、「いや、この問題は人それぞれじゃ済まない」と言い返す気概のある人は、ほとんどいないだろう。それどころか、そんなことを言ったら、ちょっと面倒なやつだと思われるにちがいない。折角その場をおさめようとしているのに、どうして煽るようなことを言うのだ、と。

これ以上、話を進めて行くと、誰かが嫌な気持ちになりそう。結果として、互いの関係が悪くなりそう。人それぞれ発言は、他者を守るために、この話を深追いするのは止めよう、という合図としても機能する。つまり、ここには多様性を守ろうとするケア的な側面がある、と言えるのだ。それゆえ、この発言に異を唱えるのが難しくなる（中略）。

いずれにせよ、人それぞれを大事にすることは悪いことではない。それは、多様性の尊重を意味するからだ。民族、文化、宗教、言語、ジェンダー、身体性などの差異を無視して、感受性や価値観や世界観を「みんな同じ」にしようとするれば、それこそ全体主義の暴力になる。全体主義のムードに比べたら、「人それぞれ」の空気感は明らかに安全なのである。

しかし、すべてが人それぞれで解決すると思っていたり、思考や対話の踏ん張りどころでいつも人それぞれを口に出して逃げたりしていたら、今度は共に生きるために必要なルールや枠組みが成立しなくなる。たとえば、いじめやテロリズムを人それぞれで済ますことはできない。

さらに言えば、最初から人それぞれだと決めてかかって、深く話し合うことをしなくなる

なら、私たちは互いに何を考えているのかが分からなくなる。実際は、確かめてみなければ、本当に違うかどうかは分からないはずなのに、意見の相違が顕在化するのを恐れて、対話そのものをやめてしまう。これは、いわば相対主義が独断化しているのであり、人それぞれが硬直化している状況だと言ってよい。では、人それぞれを守りながら、しかし同時に、その限界を突破する方法はあるのだろうか。

私の考えでは、フェイクニュースやポスト・トゥルースに振り回されるのは、相対主義（構築主義・人それぞれ）のゆりかごに安らっていることの代償である。すべてが社会的・文化的につくられているなら、フェイクニュースやポスト・トゥルースに対置させる事実や真理を見出すことはできない。すべてが人それぞれで片付くなら、フェイクニュースをつくる人も、フェイクニュースを拡散する人も、フェイクニュースを疑う人も、フェイクニュースで傷つく人も、互いに触れ合うことのない人それぞれを生きるだけである。ポスト・トゥルースと構築主義は、深いところで共鳴しているのだ。

出典：岩内章太郎『〈私〉を取り戻す哲学』講談社現代新書、2023年
（出題の都合上、出典の文章の一部を省略・改変した。）

注：

パワーヒエラルキー 権力の階層。

カルチュラル・スタディーズ 1960年代にイギリスで起こり、やがて世界各地に広がっていった文化研究の総称。正統的・支配的な文化の研究ではなく、サブカルチャーなどを研究対象として、それを権力や伝統との関係においてとらえようとするところに特徴がある。

ポピュリズム 大衆に迎合するような政治姿勢。

問1 傍線部(1)「構築主義」の功罪を、本文の内容に即して300字以内の日本語でまとめなさい。

(配点 40点)

問2 傍線部(2)「話がうまく合わなくて議論が行き詰まりそうになったときや、意見の違いが際立ってきて何となくその場が気まずい雰囲気になってきたときに、私たちは「結局、人それぞれだからね」と言う」とありますが、こうした「人それぞれ」という発言について、あなたはどのように考えますか。本文の内容を踏まえて、具体例をあげながら500字以内の日本語で述べなさい。

(配点 60点)

<出題の意図>

- 問1 フェイクニュースやポスト・トゥルースと構築主義の関係について書かれた課題文を正確に読み取ることができているかどうかを見る。
- 問2 課題文の内容に基づいて、相対主義（構築主義・人それぞれ）の問題点を論理的に記述する能力を見る。

<採点評価基準>

- 問1 次の点を見て評価する。
- (1) フェイクニュースやポスト・トゥルースと構築主義の関係について書かれた課題文の内容を正確に理解することができているか（読解力）。
 - (2) 筆者の考えを、適切な文章で表現できているか（文章表現力）。
- 問2 次の点を見て評価する。
- (1) 課題文の理解に基づいて、具体例をあげながら論述できているか（読解力、知識・理解力）。
 - (2) 自分の意見を、論理的かつ的確に表現することができているか（論理的思考力、文章表現力）。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（配点100点）

著作権者から許諾を得ていない為、著作物の引用部分のみ削除して提供します。

出典：Joe Tidy, "Airline Keeps Mistaking 101-Year-Old Woman for Baby" *BBC News*,
April 28, 2024

(<https://www.bbc.com/news/articles/c9wz7pvvjypo>, 2024.4.30 アクセス)

(出題の都合上、出典の文章の一部を省略・改変した。)

注：

compute ～をコンピュータで計算する

surname 姓、名字

witness ～を目撃する、～に居合わせる

cabin crew 客室乗務員

laugh off ～を笑い飛ばす

centenarian 100歳以上の人

glitch (コンピュータの) トラブル

default to (コンピュータの数値が) ～に戻る

wheelchair 車いす

acknowledge ～を認める

beneficial 有益な

apparel 衣服

mile マイル (約1609メートル)

reliant on ～に頼っている

adamant ～と強く主張する

put A off B AにBを思いとどまらせる

catch on to ～を理解する

問1 第2段落にある“The same thing”は、どのような状況を指しているか。課題文に即して、200字以内の日本語で説明しなさい。

(配点 50点)

問2 高齢者の数は、世界各地で増加しています。高齢者をサポートするためにどのようなことができるか。第3段落、第4段落の内容をふまえて、具体例をあげながら、あなたの考えを150語程度の英語で述べなさい。

(配点 50点)

<出題の意図>

- 問1 飛行機に搭乗した高齢者へのサポートについて書かれた課題文を正確に読み取ることができているかどうかを見る。
- 問2 課題文の内容に基づいて、高齢者へのサポートの在り方について、適切な例を示しながら、自分の考えを文法的に正しい、論理的で分かりやすい英文で記述できているかどうかを見る。

<採点評価基準>

- 問1 次の点を見て評価する。
- (1) 課題文の内容を正確に理解することができているか（読解力）。
 - (2) 筆者の考えを、適切な文章で表現できているか（文章表現力）。
- 問2 次の点を見て評価する。
- (1) 課題文の理解に基づいて、具体例をあげながら論述できているか（読解力、知識・理解力）。
 - (2) 自分の意見を、論理的かつ的確に表現することができているか（論理的思考力、文章表現力）。